

有明海水産資源回復技術確立事業*

サルボウ種苗放流

山口 大輝

有明海佐賀県海域におけるサルボウ漁は、ノリ養殖区画漁業権漁場とほぼ重なる漁場で、ノリ養殖の副業として春季から夏季に行われる重要な漁業である。

佐賀県におけるサルボウの漁獲量は、平成に入ってから1万トン以上であったが、平成10年以降は豊凶を繰り返しながらも一定の漁獲量を維持していた。しかしながら、近年は梅雨時期に発生する豪雨の影響により海域が低塩分化することから、令和3年度漁期は、一部の地区のみの漁獲、令和4～5年度漁期は、県全域で休漁になるまで資源量が激減している。

この状況を受け、昨年度は県単事業を活用し、緊急的にサルボウ稚貝を100万個放流した。今年度からは、有明海水産資源回復技術確立事業を活用し、サルボウ稚貝の200万個の放流を実施した。本報では、今年度実施した放流の概要とその後の追跡調査の結果を報告する。

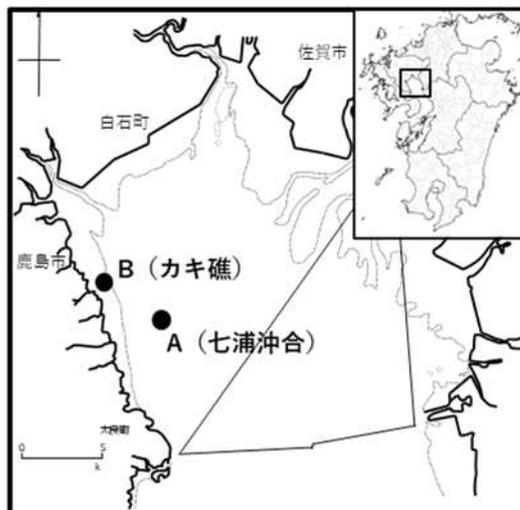


図1 放流地点図

方法

今年度の放流は、2023年10月に地点A（七浦沖合）、2024年1月に地点B（カキ礁）で実施した（図1）。放流に用いた稚貝は、佐賀県有明海漁協大浦支所（以下、「大浦支所」）で生産されたものと、株式会社二枚貝養殖研究所（長崎県佐世保市、以下「二枚貝研究所」）で生産されたものを100万個ずつの計200万個用いる予定であった。しかしながら、大浦支所での生産が不調であったため、200万個すべてを二枚貝研究所から入手し、放流に用いた（殻長約10mm）。食害・散逸対策として、地点Aについては、一部個体を玉ねぎネットに収容し、付近の観測タワーに垂下した。また、地点Bについては、網袋に収容後、杭を用いて海底に固定した。

また、地点Aにおいて、生分解性の素材であるパーム繊維を用いた基質に稚貝を付着させた状態での放流を一部で試み（図2,3）、放流作業及びその後の追跡調査の効率化が図れないか検証した。

放流後は、月に1回程度、殻長及び生残率の測定を行った。



図2 パーム繊維に付着した稚貝



図3 放流器具のイメージ図

*国補助事業名：有明海漁業振興技術開発事業

結果

各地点の生残率及び平均殻長の推移について、図4,5にそれぞれ示した。サルボウ稚貝の生残率は、地点Aでは2024年2月時点で93%、点Bでは95%で推移した。平均殻長は、地点Aで12.8mm、地点Bで11.4mmで推移した。両地点とも、大きな減耗はなく、引き続きモニタリング調査を実施していく予定である。

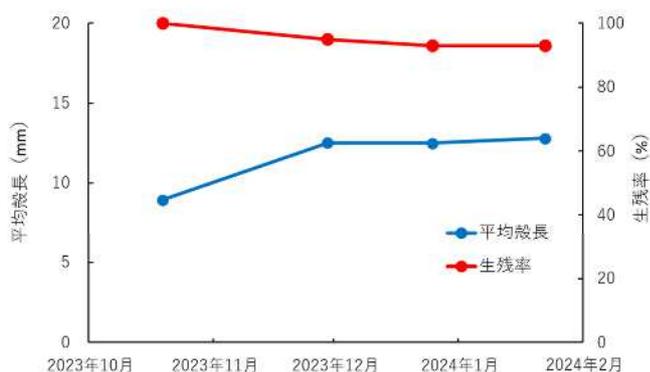


図4 地点Aにおける生残率及び平均殻長の推移

一方で、地点Aで試みた生分解性の基質に付着させた状態での放流は、放流前から基質の劣化が進行し、非常に扱いづらかったことに加え、放流1カ月後の調査時には、基質からの脱落が多数確認されるなど(図6)メリットが感じられなかった。以上のことから、当初、想定していた放流作業及びその後の追跡調査の効率化を図ることができなかった。

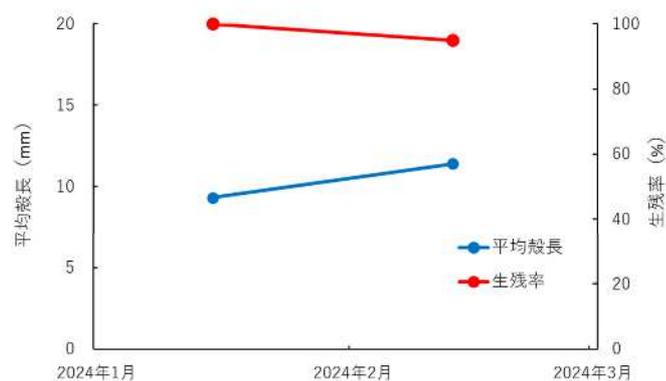


図5 地点Bにおける生残率及び平均殻長の推移



図6 稚貝が脱落し、追跡不可能となった基質(放流1カ月後の様子)

文献

- 1) 真崎邦彦・小野原隆幸(2003):有明海湾奥部におけるサルボウ漁獲実態と分布状況. 佐有水研報, (21), 29-36.